

幼稚園教育実習の指導のあり方について —実習園の評価と学生の自己評価との比較から—

A Study on a Student Teaching Program in Early Childhood Education : Based on a Comparison between Students' Self-evaluations and Kindergartens' Assessment Results

名倉 一美* 三輪 千明** 茂井 万里絵***
(1, 4 章担当) (2 章担当) (3 章担当)

1. はじめに

(1) 目的

幼稚園教育実習は、幼稚園教諭免許状取得のための必修科目である。学生は実習を通して直接幼児と関わることにより、幼児期の子どもの特性について理解を深めることができる。また間近で幼稚園教諭の仕事に触れることで、幼稚園教諭の役割を具体的に知り、理想の保育者像を描くことができる。さらに実習を通して、これまで授業で学習してきた各専門教科の理解を深めるとともに、各教科間の統合をはかり、総合的に保育を理解することができる。このような点から、幼稚園教育実習は、将来保育者を目指す学生にとって、重要な学習の場であるのは間違いない。しかしその実施方法については、基本的に各養成校に任せられている。特に事前事後指導は、幼稚園教育要領等の関連法規に定められている目的や内容に沿うことが前提としても、具体的な内容や方法については、各養成校の教育方針により違いがみられる。そのため、他大学でも実習指導の方法や内容についての検討がなされている（岩立・森下 2007、山田・森田 2007）。幼稚園教育実習の主たる指導の場は、実際の幼稚園現場であり担当教諭によるものである。しかし大学での事前事後指導の中で、どのような準備や心構え、実習後の振り返りを行うかによって、学生の実習中の学びの深度に影響が出てくる。

ところで、本学子どもコミュニケーション学科は、幼稚園教諭養成課程を備えた学科として、平成19年度から開設された新設学科である。そして本年度、4学年の全てが在籍する完成年度を迎えた。必修科目である幼稚園教育実習については、実施を3年次後期と4年次前期と定め、平成21年度と22年度にかけて第一期生が修了した。その間、指導内容や

* 浜松学院大学（保育学）

** 浜松学院大学（比較・国際教育学）

*** 浜松学院大学（障がい児保育）

方法について、担当教員間で検討を行い、ガイドラインとなる手引き（茂井・名倉・三輪 2009）や指導ツールである日誌を作成し、事前事後指導に取り組んできた。本稿では、本学の幼稚園教育実習の初年度修了にあたって、本学の事前事後指導を含む幼稚園教育実習の成果および課題を明らかにし、今後の幼稚園教育実習の指導の質向上を目指していくことを目的とする。

(2) 背景—本学の幼稚園教育実習事前事後指導について

本学における幼稚園教育実習では、次の4点をねらいに定め実施している。

- ①専門的に子どもを理解する。
- ②総合的に保育を理解する。
- ③具体的な実践力を身につける。
- ④望ましい勤務態度を身につける。

「専門的に子どもを理解する」といったねらいでは、幼児に積極的に関わって信頼関係を築く中で、健康や安全面に配慮しながら、一人ひとりの発達を理解し、個に応じた援助ができることを目指す。「総合的に保育を理解する」といったねらいでは、園の教育方針や生活の流れを理解し、環境構成や援助などの専門的な知識・技術を身につけ、幼稚園教育のねらいに即した日誌の記述及び考察ができることを目指す。「具体的な実践力を身につける」といったねらいでは、積極的に幼児と遊び、全体をみながら臨機応変に対応し、協調性を持って他の保育者と連携しながら、創意工夫のある保育ができることを目指す。「望ましい勤務態度を身につける」といったねらいでは、身だしなみや提出物の期限厳守などの適切な勤務態度を身につけるとともに、率先して清掃・環境整備などを行い、指導教諭への積極的な質問や指導教諭からの助言を次に活かす態度を身につけることを目指す。

これらのねらいが実習中に達成できるよう事前事後の指導を行い、各学生の実習中の目的を明確化した。具体的な事前事後指導の内容は、表1、表2のとおりである。

表1 浜松学院大学 平成21年度後期 幼稚園教育実習事前事後指導 3年次生対象

回	月	日	題目	主な内容
1	9	28	教育実習の概要	全体の流れ、実習の内容と意義、保育実習で学んだことについてアンケート回答
2	10	5	幼児教育とは	保育実習で学んだことの振り返り、幼稚園教育の目的と意義、関連法規について
3	10	19	実習に向けての心構え	幼稚園教諭の役割、実習に臨む態度、事前オリエンテーションについて
4	10	26	実習中の態度	身だしなみ、名札、出退勤のルール、マナー、禁止事項について
5	11	2	外部講師による講話	城北幼稚園 飯泉真弓先生「実習の心構え、実習と実習後について」
6	11	9	実習録について	実習録のねらい、実習日誌の書き方と留意点、部分実習の予告
7	11	16	実習録について	日誌(記録)の書き方と具体例、日誌(観察及び考察)の書き方の具体例
8	11	30	指導案作成について	部分実習とは、指導案の必要性、指導計画の全体像、指導案作成の留意点、教材研究予告
9	12	7	指導案作成について	実習日誌の中での部分実習の扱い方、部分実習指導案作成の留意点と具体例
10	12	14	必要書類作成	「個人調査票」「実習にあたって」の作成指導、部分実習指導案提出
11	12	21	必要書類作成	「個人調査票」「実習にあたって」のチェックと提出
12	12	24	部分実習の計画と実施	指導案に沿った部分実習の実施
13	1	18	事前オリエンテーションについて	オリエンテーションの必要書類配布と確認、マナー再確認、緊急時の連絡先について
14	1	21	まとめ	小テスト、自己採点と内容の再確認、添削済み指導案の返却と総評
観察実習(平成22年2月18日～26日)				

表2 浜松学院大学 平成22年度前期幼稚園教育実習事前事後指導 4年次生対象

回	月	日	題目	主な内容
15	4	8	観察実習の振り返り	個々に実習録を見ながら観察実習の振り返りと自己評価
16	4	15	責任実習の指導案作成について	責任実習指導案作成について、日案の書き方のポイントと具体例、指導案作成練習
17	4	22	教材研究の発表	グループ別(手遊びと絵本、手遊びと紙芝居、手遊びと弾き歌い、ゲーム)教材研究の発表
18	5	6	外部講師による講話	浜松市教育委員会 小野昌代先生「教育実習に向けて-実習生としての心構えと態度」
19	5	13	日誌の書き方について	添削済みの指導案返却と総評、日誌とエピソード記述の書き方、緊急時の連絡先、礼状の作成
本実習(5月20日～6月9日)				
20	6	10	本実習の振り返り	個々に実習録を見ながら本実習の振り返りと自己評価
21	6	17	実習報告会(2コマ)	3,4年次生の前で各自3分間の実習報告

以上のような内容で、先述の①～④のねらいが達成できるよう、実習の意義理解、日誌や指導案の書き方、実習態度、教材研究等の実践力に対する指導を行った。

(3) 方法—幼稚園の評価と自己評価の比較

先述した事前事後指導の授業を通して、学生は実習に必要な技術を身につけ、自身のねらいを持って実習に臨んだわけであるが、果たして実際には、どの程度ねらいが達成できたのであろうか。学生の実習における成果を測るため、本学では、別表1に示す幼稚園教育実習評価票を作成し、幼稚園の実習指導担当教諭に、この評価票に記入することを依頼した。なお、ここでの評価は、本学の幼稚園教育実習における4つのねらいそれぞれに対応しており、①専門的に子どもを理解する→「幼児の理解」、②総合的に保育を理解する

→「総合的理解」、③具体的な実践力を身につける→「実践的な力」、④望ましい勤務態度を身につける→「勤務態度」とし、各項目それぞれに具体的な評価観点を記述した。

この評価票に記入された幼稚園の実習指導担当教諭による評価が、学生の実習における成果を示すものである。一方で、学生の実習成果は事前事後指導による影響も含まれると考えると、ここでの評価の一部は、大学の事前事後指導の内容や方法に対する評価であるともいえる。そこで本稿では、本学の実習指導で目指す4つのねらいについて、本学の学生がどのように評価されているかを検討し、今後の指導の課題を明らかにしていく。また、幼稚園の実習担当指導教諭による評価は外部からの評価であるが、学生自身は実習を通してどのような成果があったと感じているかが重要である。幼稚園からの評価と学生自身の自己評価とが同一であれば、その学生は、本学の実習のねらいを理解しており、自分自身を客観的に振り返ることができ、今後の伸びにつながるであろう。しかし、幼稚園からの評価と学生自身の自己評価にずれが生じていた場合、その学生は実習のねらいを十分に理解しておらず、客観的な振り返りができないといった問題が生じていると考えられる。このような評価のずれは、今後の事前事後指導で修正することが必要であり、初年度における幼稚園教育実習の指導における課題といえるだろう。そこで本稿では、幼稚園からの評価と、学生自身の自己評価を比較検討し、今後の課題を明らかにしていく。

2. 園評価と自己評価の結果の比較

ここでは、幼稚園教育実習の「本実習」における本学実習生の評価について、「園評価」と「自己評価」の結果を比較する¹。園評価とは、前述の「幼稚園教育実習評価票」(別表1参照)に沿って各実習園が本実習終了日である2010年6月9日以降、同年6月末までに行った各実習生の評価を指している。自己評価とは、同じ評価票を用いて、教育実習の履修者42名の内、本実習を終えたばかりの40名を対象に、2010年6月10日に行った自己評価の結果である。当然ながら、実習園は園評価を行う時点で実習生の自己評価結果については知らされておらず、実習生たちもまた自己評価を行う時点で園評価の結果を知らされていなかった²。

実習生の評価を行った実習園の総数は、2名の学生が同じ園で実習を受けたところもあるため、公立計13園、私立計20園となっている。この内、浜松市内にある園は計18で、実習園全体の54%を占め、残り15園は静岡県の他市内にある。また、自己評価を行った実習生は調査時点で全員が4年次生で、平均年齢は21.3歳であった。内、男子学生は計6名で、全体の1.5%を占めている。なお、園評価と自己評価の結果ではいずれにおいても欠損値はなかった。

最初に、評価結果の平均点を比べてみよう。図1は、園評価と自己評価の平均点を四つの項目別に比較したものである。Y軸に評価点(最低点が1点、最高点が5点)、X軸には

「幼児の理解」、「総合的理解」、「実践的な力」、「勤務態度」という四つの評価項目が記されている。まず、いずれの項目においても自己評価の方が園評価の結果よりも低い傾向が見られる³。この結果を、実習生の謙虚さや自信の無さの反映と見るか、もしくは実習園の寛容さの表れと捉えるかについては適切な判断材料が見当たらないが、この点については後程、詳しく見ていくこととする。次に、園評価と自己評価の結果に共通する点として、四つの項目間で比較した場合の結果の高低差がある。すなわち、いずれにおいても勤務態度の評価結果がもっとも高く、次いで幼児の理解、総合的理解の順となり、実践的な力に対する評価結果はもっとも低くなっている。

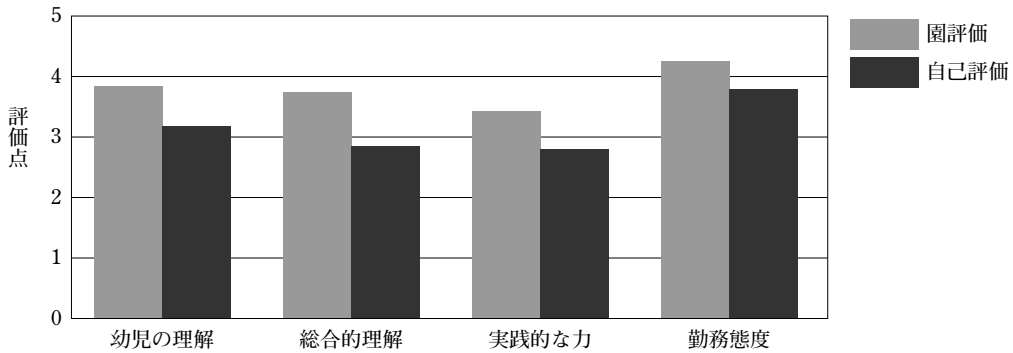
表3は図1に示した結果を一覧にしたものである。ここでは平均点の差について見ていこう。園評価と自己評価の平均点の差を評価項目別に見てみると、総合的理解（.90）、幼児の理解（.67）、実践的な力（.63）、勤務態度（.45）となっており、総合的理解の項目において園評価と自己評価の評価点の平均差がもっとも大きいことがわかる。また、園評価と自己評価それぞれにおいて各項目間での点差を見てみると、園評価における総合的理解（3.75）と実践的な力（3.43）の平均差は.32であるが、自己評価における二つの項目の平均点（2.85、2.80）の差は.05でしかない。この二つの平均差の差（.32-.05=.27）は他のどの項目の差よりも大きい。すなわち、実習生は総合的理解と実践的な力の水準にはわずかな差しかないと考えているのに対し、実習園側では総合的理解に比べて実践的な力の方が見劣りすると判断されたことがわかる。

表3には上述の四つの評価項目の合計値である総合評価の結果も記されている。総合評価の評価点は最低で4点、最高で20点の幅をもっている。ここでも園評価よりも自己評価の結果の方が低いことが改めて確認できる。なお、図表には示していないが、実習生の性別による評価点の差を四つの項目と総合評価で見ると、園評価と自己評価のいずれにおいても男子学生の方が女子学生より低い値を取っている。評価点の男女差は、園評価においては実践的な力でもっとも大きく（.70）、自己評価においては勤務態度でもっとも大きかった（.94）。

以上は平均点の比較であるが、当然ながら園評価と自己評価の結果は個々の実習生によって異なっており、すべての学生の自己評価が園評価よりも低いわけではない。そこで、以下では個々の学生別に園評価と自己評価の評価結果を比べ、自己評価が園評価よりも高い群（以下、「自己評価がより高い群」）、園評価と自己評価が同点の群（以下、「同点群」）、園評価が自己評価よりも高い群（以下、「園評価がより高い群」）という三つのグループに分けて評価結果を比較する。

図2は、その三つのグループ別に四つの評価項目と総合評価の結果を示したものであり、Y軸に人数、X軸に各項目を取っている。自己評価がより高い群はいずれの項目においてももっとも人数が少ないが、特に幼児の理解で最少となっている。次に、同点群を見てみると、四つの項目の中では勤務態度での人数がもっとも多く、次いで幼児の理解となって

図1 園評価と自己評価の平均点の比較（項目別、N=40）



(出所)筆者作成

表3 園評価と自己評価の結果一覧

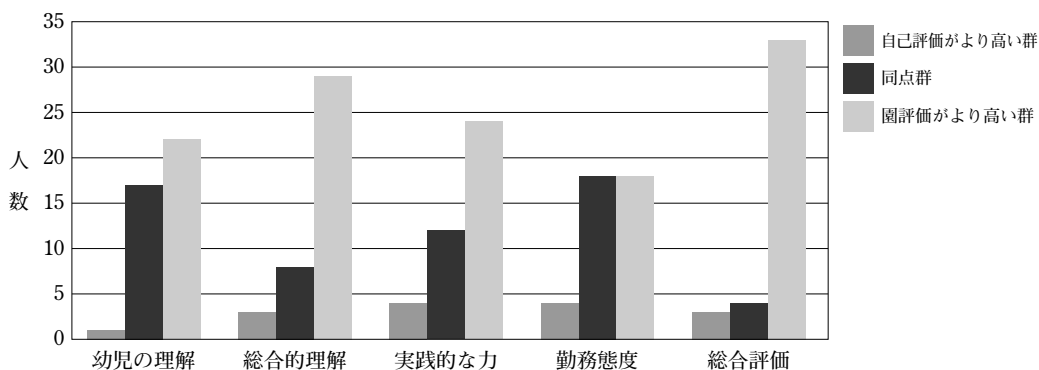
	園評価 (N=40)		自己評価 (N=40)		平均点の差 ①-②
	M (①)	SD	M (②)	SD	
幼児の理解	3.85	.86	3.18	.71	.67
総合的理解	3.75	.90	2.85	.77	.90
実践的な力	3.43	.84	2.80	.79	.63
勤務態度	4.25	.84	3.80	.97	.45
総合評価	15.28	2.96	12.63	2.53	2.98

(出所)筆者作成

いる。一方、園評価がより高い群については、四つの項目の中では総合的理解において人数がもっとも多く、実践的な力がそれに続く。これらの結果から、勤務態度と幼児の理解においては、他の項目に比べて、実習生と実習園の評価結果の一致がより多く見られたと言える。他方、総合的理解においては園評価と自己評価にずれを生じたケースが他の項目に比べてもっとも多く、実践的な力における評価結果の不一致がその次に多いことがわかる。ただし、総合的な理解と実践的な力のいずれの項目においても、園評価がより高い群の人数が他の二つのグループに比べてもっとも多くなっている。

では、以上の三つのグループの評価点はどのように違っているのだろうか。図3はグループ別と四つの評価項目別に園評価の評価点を比較したものであり、Y軸に評価点、X軸に各グループを示している。本図からは以下の点が見える。まず、いずれの評価項目においても園評価がより高い群はそれ以外の二つのグループに比べて評価点が高い。すなわち、園評価の高い学生ほど自己評価を低くつける傾向が窺えることから、各園の間での評価基準が一定であったと仮定すれば、こうした結果は学生の謙虚さ、もしくは自信の無さの反

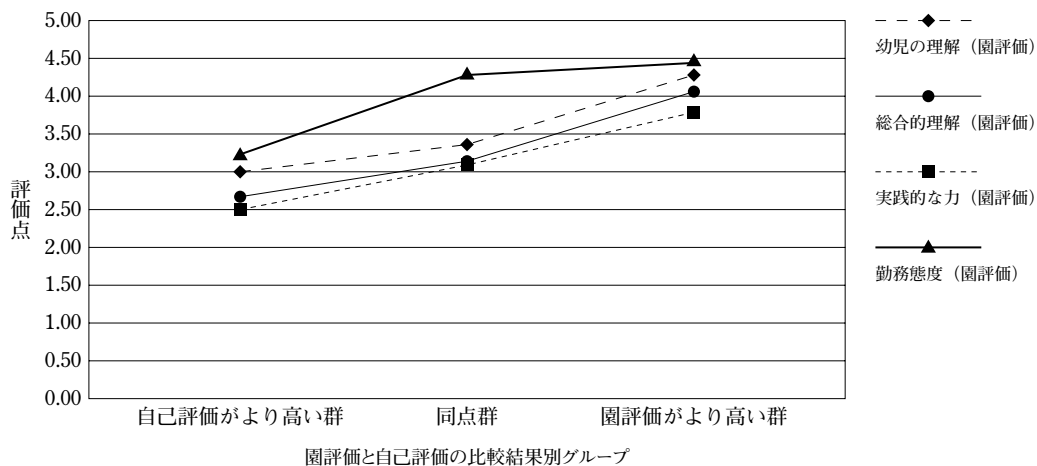
図2 園評価と自己評価の比較結果別グループの分布



(出所)筆者作成

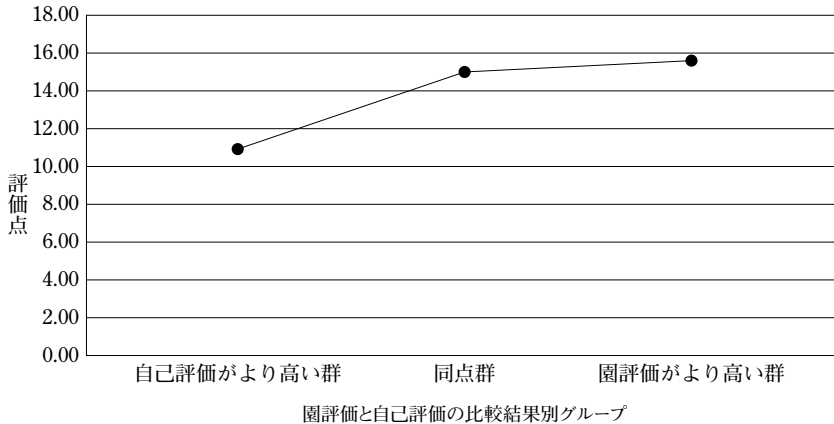
映と捉えることができるだろう。また、前述の平均点の比較結果で観察されたように、いずれのグループにおいても園評価の結果は勤務態度がもっとも高く、幼児の理解、総合的理解、実践的な力の順に低くなっている。自己評価がより高い群と園評価がより高い群の間でもっとも大きな点差が見られたのは総合的理解（1.36）の項目であった。図4は、総合評価における三つのグループの結果を比較したものであるが、図3と同様の傾向が窺える。

図3 グループ別の評価点の比較（評価項目別）



(出所)筆者作成

図4 グループ別の評価点比較（総合評価）



(出所)筆者作成

以上の結果は次のようにまとめることができる。まず、平均点の比較においては、園評価でも自己評価でも勤務態度の評価結果がもっとも高く、実践的な力がもっとも低かった。また、平均点にみる双方の評価結果の食い違いがもっとも大きかったのは総合理解の項目であった。次に、学生個々のデータをもとに、自己評価がより高い群、同点群、園評価がより高い群の三つのグループに分けて行った比較によると、総合理解において学生と実習園の認識にもっとも大きな不一致が生じ、次いで実践的な力の評価結果にずれが多く見られた。さらに、同じグループ別に評価点の平均点を比較した結果では、園評価の結果が高い学生ほど自己評価を低くつける一方で、園評価の結果が低い学生ほど自己評価を高くつける傾向が見られた。双方のグループでもっとも大きな点差が観察されたのは総合理解であった。

これらの結果を教育実習の授業内容に照らし合わせて考察を加えると、以下の四点が指摘できるだろう。第一に、実習生の勤務態度に高い評価結果が得られた一つの要因としては、教育実習の授業において勤務態度に関する指導を強化・徹底したことが挙げられる。これは2010年1月27日に本学で実施された「平成21年度 幼稚園教育実習連絡協議会・研究会」⁴⁾において複数の実習園から示された要望を、その後の授業内容に反映した結果であった。第二に、実践的な力については、教育実習の授業の中で指導案の作成と添削や、少人数での模擬的な部分実習の実施や指導も行ったものの、園評価や自己評価ともにもっとも低い評価結果となった。実習生とはいえ、既に4年次生である学生の評価結果としては看過することができず、教育実習のみならず、他の教科においても今後の指導強化や改善が必要と考えられる。第三に、実践的な力の次に評価点が低く、また園評価と自己評価の結果においてもっとも大きな不一致の見られた総合理解の項目については、学生に対す

今後の指導を強化する一方で、今後は本評価項目が指し示すものを園や実習生の双方に
いっそう明確にする必要性もあるだろう。最後に、園評価の結果が低い学生ほど自己評価
を高くつける傾向については、教育実習の指導を通して、良好な園評価を受けられそうに
ない学生に対しては自らの能力に対する自覚を促し、客観的な判断につなげられるような
支援を行うことも今後の課題の一つとなっている。

3. 記述から見る評価結果の比較

2. においては、園の評価と自己評価の全体を通して比較検討を行った。次にこの章に
おいて、園評価と自己評価を各個人についての比較を行うこととする。

前章にて説明した通り、実習を終えた学生には園に依頼した評価票と同様の評価票を用
い、5段階評価をすることに加えそれぞれ自分が考えられる理由をコメント欄に記すこと
を課した。また自分なりの反省を踏まえ、できる限り総合所見も記述するように促した。
それらの比較から読み取れることについて述べていくこととする。

なお今回は、園評価と自己評価の差が大きく、特に自己評価が低い「総合的理解」と
「実践的な力」に関してとりあげ、それぞれ園評価と自己評価が一致、または不一致であ
る記述をそれぞれ検討することとする。

また「総合的理解」、「実践的な力」はそれぞれ下位項目として「評価の観点」を設け、
それに従って学生自身がどうであったかを各項目について総合的に自己評価している。
さらに評価項目の5段階評価の得点を足して総合評価とし、園からの総合評価が成績に反
映される。

以下にその観点を示しておくことにする。

「総合的理解」

- ・園の教育方針に応じた活動について理解できたか。
- ・園務の意味や、1日の流れにそった保育者の役割が理解できたか。
- ・環境構成や援助などの専門的な知識、技術を実践的に理解できたか。
- ・日誌や指導案の作成において幼稚園教育のねらいに即した記述及び考察ができたか。

「実践的な力」

- ・積極的に幼児と遊び、特定の子に限らず全体にも気を配ることができたか。
- ・幼児の状況に応じて、臨機応変な対応ができていたか。
- ・探究心を持ち、創意工夫をして保育を行うことができたか。
- ・協調性を持ち、他の保育者と連携して保育をしていたか。
- ・幼稚園教諭の仕事を具体的に理解することができたか。

また、備考欄には、5段階の評価点についての説明を加えている。

(5「優れている」、4「やや優れている」、3「普通」、2「やや劣っている」、1「劣っている」……合計点7点以下は不可とする。)

では、それぞれ自己評価<園評価、自己評価=園評価、自己評価>園評価の順にそれぞれの内容について比較しながら詳しく見ていくこととする。

(1) 自己評価<園評価

記述例

○総合的理解

- ・園：「子どもの心の読み取り、行動についての分析をし、考察につなげることができた。」(評価点5)
- ・学生：「何を援助するか判断し、積極的に動くようにした。」(評価点4)

○実践的な力

- ・園：「多くの子どもたちと関わることができた。責任実習では、事前からの準備ができていた。」(評価点4)
- ・学生：「責任実習の時に雨だったので予想外だったが臨機応変に対応できた。」(評価点2)

ほとんどの学生が「自己評価を低めに捉える」パターンである。言い換えれば、「一般的な判断」ともいえるのではないか。

実際の実習中において、先生方からの助言指導、または注意されたこと、褒められたことなどに照らし合わせ、「自分の評価はこのくらいかも知れない」という判断をする。しかし、そのレベルより少し低く考えて自己評価するのがこのタイプであろう。

北山(1994)によると、日本人にはこの「自己批判・卑下的傾向」が多くあるという。日本の社会においては、自己評価が「相互依存的・協調的自己観」と呼ばれる文化や習慣などが反映された関係を維持して初めて自己の社会的存在を確認し自己実現を図るというパターンによって成り立っている場合が多いのだという。

まさにそのようなタイプだと思われるケースが多く見られる。

また、自分の評価に関して正しく見るというより、低く見ることによって、実際に園からの評価が自分の考えているものより低かったとしても、それを自分自身が「受け入れられる」ために、「低く」見ておけば安心、という一種の自己防衛的手段とも考えられるケースもある。あるいは下位項目のうち一つでも不満足だと思っていた場合や自分ができていない、注意されたと思う場合にはほかの下位項目が優れていても低い評価をする傾向にある。

しかしながら特に気をつけるべきは、自分の評価としてプラス面マイナス面が明確に理解されていない場合もこのパターンになることである。自分では、なにがどのようにできたか出来ないかの判断がつかず、よくわからないけれども実習先の先生方の雰囲気などで「決してよくはないからこのくらいだろう」という判断をしてしまう。自己評価が客観的にできないタイプである。また下位項目にあたる部分が実習においてなされなかった場合も低く評価することとなる。例えば、「実践的な力」の「協調性を持ち、他の保育者と連携して保育をしていたか」などの場合、「他の保育者との連携」はできていないからダメだという判断である。

また次のようなケースも見受けられた。

記述例

○総合的理解

- ・園：「園の方針について理解し、それに合わせて指導案を考えることができた。」(評価点5)
- ・学生：「ねらいに即した記述および考察が具体的に書けていなかった。」(評価点3)

- ・園：「日案では自分の援助について振り返り、考察することができた。また、保育者の言動から、教育方針や役割など色々なことを学べた。」(評価点4)
- ・学生：「具体的な記述ができなかった。」(評価点2)

○実践的な力

- ・園：「個々の遊びには十分に楽しみを広げていこうと努力していた。クラス全体の活動となると型にはめた活動となってしまうため応用力がつくとよい。」(評価点4)
- ・学生：「主任の先生から言われていた、自分から子どもたちに遊びを提供する、といったことができなかった。」(評価点2)

学生の「コメント」からは、実習指導の担当教諭と自分を比較し、客観的に自分を判断している学生もいることが分かった。指導教諭の姿や助言などから「まだここが足りない」と自分に欠けている部分を振り返ることから生じる前向きな反省の結果のパターンがある。学生は注意されたから、また書き直しと言われたからよくは評価できない、と考えているが現場の保育者にしてみれば、指導の結果実習中に学びとれたことを重視し、できていたかということの評価するのではなく、実習にそこまで望むことではないと考えて指導にあたり、実習生として学習効果があれば十分、という観点から園からは高い評価を得ることになる。しかし学生本人は「実習生」としての本来の自分の立場から離れ、新任保育者さながら訂正ややり直しが多かったから、現場の指導して下さった先生にはとても追

いつかない、まだまだだ、教えてもらったからできた、実際にはできないのでは、と低く評価する、という現象が起きるのではないかと考えられる。保育者と自分を客観的に比較する、または助言を前向きに反省におきかえる、という実習に対する積極的なふり返りができているとも言い換えられるのではないか。

(2) 自己評価＝園評価

記述例

○総合的理解

- ・園：「職員が少なく実習生も職員同様動いてくれた。」(評価点4)
- ・学生：「保育者の援助や環境構成を理解しようと努めていた。」(評価点4)

- ・園：「いろいろな仕事に進んで取り組んでくれた。」(評価点4)
- ・学生：「実際に責任実習をしたり先生の姿を観察したりする中で、環境の整え方や遊びの援助の仕方を実践的に学ぶことができた。」(評価点4)

○実践的な力

- ・園：「積極性に欠け実践から遠ざかってしまっていた。特定の子どもの関わりが多く全体への呼びかけが見られなかった」(評価点2)
- ・学生：「園全体の幼児と関わり援助することはできたが、事前準備が不十分だった。」(評価点2)

- ・園：「責任実習では、指導案をもとに保育を進めていたが、全体に気をくばるところが少し欠けていた。」(評価点3)
- ・学生：「幼児の姿、状況に応じて臨機応変に動けなかった。」(評価点3)

園評価と学生の評価が同じになる場合を考えてみる。ある程度実習生として評価されているがまだ最も高い評価とはなり得ないというケースでは、実習生としては「ほめられた」から評価されているけれど、自分では「自己卑下的」に最も高い評価にできないため「4」にしたら園の評価と同じになってしまった、というパターンになることもあり、内容的には園と学生において少し「ずれ」があるケースも多い。(「評価の観点」の読み取りの差もあるかもしれない。)

また、低い評価になった場合、「1」とはならずお互い「2」で踏みとどまる場合など、内容は様々である。園としては「1」にするのは自分たちの指導もありながら最低にすることに対しては遠慮してしまいがちになる。あるいは「1」を付けると総合評価として実習の単位をもらえないのであろう、と学生のために考え方を前向きに捉えている場合もあ

る。しかし本人は「よくない」けれど「1」ほどではない、または「3」ほどよくないから「2」（園は「1」をつけたいにもかかわらず）、と思っているなど、ずれが生じることもある。

全体的にすべての評価が高い学生の場合においては、その中で特に「実践力」において後一步、もう少し努力して欲しい、という場合などが見られる。

(3) 自己評価>園評価

記述例

○総合的理解

- ・園：「日誌、指導案の記述、考察では内容が薄く、また反省を書くのみで実践されていなかった。」（評価：2）
- ・学生：「先生にアドバイスをいただきながら指導案を作成した（することができた）。」（評価：3）
- ・園：「日々の活動の中で自分の目標を持ち、実践しようという姿勢に好感が持てた。ただ、活動のねらいを読み取る力にはやや欠け、それに対する理解を深めようとする前向きさが感じられない。」（評価：2）
- ・学生：「専門的知識をもう少し持つといいと感じた。」（評価：3）

○実践的な力

- ・園：「オルガンが苦手、手遊びは知らないということで実践ができなかった。」（評価：2）
- ・学生：「子どもたちと関わる中で全体の様子を確認できるよう意識していた。」（評価：4）
- ・園：「日常の子どもの様子から実習の主題を設定できました。実践にあたり計画・準備に不十分な面が多く見られました。全体または個々への適切な働きかけや統率力が身につけばと思います。」（評価：3）
- ・学生：「教諭の仕事の理解をし、他の先生方とも連携していたが、自ら仕事を見つけていないときもあった。」（評価：4）

園からの評価が全体的に低い場合、特に気になるタイプである。

園で考えているほど、本人の評価は低くはない。理由としては、学生自身がいつも以上に「とにかく頑張った」結果と捉えている場合が多いからである。本人の性格、つまり個の問題も含まれる場合もあるため、実習指導のみで指導しきれないことが多い。あるいは、

大変残念だが思いが至らない、というものが数例見られる。今後の個別指導が必要なケースであろう。

一方では本人はいたって真面目で、朝早く行く、掃除は率先して行うなど、勤務態度としては一生懸命さが伝わるようであるが、それがどれほどできていても日誌等の提出期限などが守れない、保育者からのアドバイスが有効に生かされていない、などの場合、評価は当然低くなる、という結果になる。しかしながら、本人は提出物を期限に遅れてはいるが最終的には出している、それほど大きな問題として捉えていない、あるいは捉えられないのではないと思われるケースもある。提出期限については事前指導においてもっと強調していく必要がある。

また、「明るさが足りない」「積極性がみられない」などの表記がある場合、本人にとっては「真面目」「大人しい」「じっくりと物事を考える」など「個性」として捉えていて改善の余地がないと思っているのではないと思われる場合もある（園側にとっては「適正」または「積極性」として判断されることもある。もちろん、園との相性の問題もないとは言いきれないであろう）。このような、「個性」であったとしても明るさや動きが軽いなど、「保育者」としての適性として重視している部分ともうかがえる面の欠如に対して、どのように指導していくのが課題である。

4. おわりに

本稿では、本学第一回目となる幼稚園教育実習指導が修了し、その成果と今後の課題点を明らかにするため、園評価と学生自己評価の比較検討を行った。その結果浮かび上がってきたのは、次の四点である。第一に、教育実習の授業における勤務態度に関する指導を強化・徹底したことにより、勤務態度の向上がみられ、園からも学生自身からも評価が高かった点である。今後の実習指導においても、これまでの指導内容や方法を継続していくことが有効であるだろう。第二に、実践的な力については、園評価や自己評価ともにもっとも低い評価結果となり、改善が必要であるだろう。ただし、実践的な力を身につけるためには、教育実習事前事後指導の授業内のみでは不十分であり、学科全体で取り組むべき課題として、今後の指導強化および改善が必要と考えられる。第三に、実践的な力の次に評価点が低く、また園評価と自己評価の結果においてもっとも大きな不一致の見られた総合的理解の項目については、本評価項目が指し示すねらいについて、園や学生双方に明確に示していくことが必要であるだろう。このことは、園評価「日案では自分の援助について振り返り、考察することができた。また、保育者の言動から、教育方針や役割など色々なことを学べた」（評価：4）学生評価「具体的な記述ができなかった。」（評価：2）といった評価記述の内容のずれからも明らかといえるだろう。最後に、園評価の結果が低い

学生に対しての指導が大きな課題であることが浮き彫りとなった。こうした学生ほど園評価が低いにも関わらず自己評価を高くつける傾向があり、実習のねらいが把握できておらず、自己の客観化に乏しいため、今後の成長を促すのが難しい。教育実習の指導を通して、自らの能力に対する自覚を促し、ただ「頑張った」だけでは実習の成果とはいえないことに気づかせ、客観的な判断につなげられるような支援が重要となる。

なお、この度の実習指導に際して、幼稚園教育実習連絡協議会・研究会で実習園から受けた生の声が大変参考になった。実習は、大学だけの指導や努力で成り立つものではなく、実習園の理解と協力があってこそ、効果があがるものである。今後も本学の実習の内容が深まり、より質の高い保育者の育成が担えるよう、実習園との円滑な連携を目指し、課題を共有していきたい。

注

- ¹ これらのデータを本研究に用いることについては全実習生の承諾を得ている。
- ² 但し、学生は3名を除き、同じ実習園で2010年2月に一週間の観察実習を行っており、その実習に対する園評価の総合評価（A～F）については同年4月時点で通知されている。しかし、項目別の評価点や総合評価のもととなる素点は知られておらず、また、今回の評価対象となる本実習はその目的も、実施期間も、内容も異なっていることから、観察実習の総合評価を知っていることが今回の自己評価結果に与える影響は少ないと考えられる。
- ³ 本研究は、本学における2010年度教育実習の授業内容が受講生に与えた効果を本実習の評価結果の比較から考えるものであり、対象数（ N ）は少ないものの、この点では悉皆調査と言える。母集団から標本をとって行う研究ではないため、平均値の差の有無などについての統計的検定は行っていない。
- ⁴ 本学の教育実習および実習指導の内容に対する実習園からの理解を図るとともに、実習園の意見を本学の実習指導に反映させることを目的として開催されるものであり、平成21年より毎年1回実施している。

引用文献

- 岩立京子・森下葉子（2007）「幼稚園教育実習の評価に関する研究：評価視点と評価方法の分析」『日本教育心理学会総会発表論文集』（49）, 273
- 北山忍（1994）「文化的自己観と心理的プロセス」『社会心理学研究』第10巻第3号153-167
- 茂井万里絵・名倉一美・三輪千明（2009）「幼稚園教育実習の手引き」浜松学院大学 幼稚園教育実習委員会
- 山田達雄・森田真紀子（2007）「幼稚園教育実習評価の妥当性と的確性に関する研究」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』39, 141-153

別表1 幼稚園教育実習評価票（本実習）

学籍番号					実習幼稚園名				
ふりがな 実習生氏名					園長名	印			
配属学級	(歳児)				指導教諭名	印			
実習期間	平成	年	月	日 ()	～ 平成	年	月	日 () 合計	日間
勤務状況	出勤	日	欠勤	日	遅刻	回	早退	回	備考
評価項目	評価点	評価の観点						コメント	
幼児の理解	5 4 3 2 1	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児に積極的に関わり、信頼関係を築くことができたか。 ・ 配属学級の幼児の姿や実態を理解し、それにそった援助ができたか。 ・ 一人ひとりの発達を理解し、適切な対応ができたか。 ・ 幼児の健康面や安全面に配慮した援助をすることができたか。 							
総合的理解	5 4 3 2 1	<ul style="list-style-type: none"> ・ 園の教育方針に応じた活動について理解できたか。 ・ 園務の意味や、一日の生活の流れにそった保育者の役割が理解できたか。 ・ 環境構成や援助などの専門的な知識、技術を実践的に理解できたか。 ・ 日誌や指導案の作成において、幼稚園教育のねらいに即した記述及び考察ができたか。 							
実践的な力	5 4 3 2 1	<ul style="list-style-type: none"> ・ 積極的に幼児と遊び、特定の子に限らず全体にも気を配ることができたか。 ・ 幼児の状況に応じて、臨機応変な対応ができていたか。 ・ 探究心を持ち、創意工夫をして保育を行うことができたか。 ・ 協調性を持ち、他の保育者と連携して保育をしていたか。 ・ 幼稚園教諭の仕事を具体的に理解することができたか。 							
勤務態度	5 4 3 2 1	<ul style="list-style-type: none"> ・ 勤務態度(出勤時間、身だしなみ、言葉遣い、挨拶など)は適切であったか。 ・ 日誌、指導案など提出物の期限や指示事項を守れたか。 ・ わからないことは早めに質問し、指導教諭の助言を聞き入れ、次の実習に活かすことができたか。 ・ 園舎内外の清掃・環境整備など、率先して行ったか。 							
合計点		所見							
総合評価									
<p>備考 評価点は、5「優れている」、4「やや優れている」、3「普通」、2「やや劣っている」、1「劣っている」の5段階評価で該当する数字に○をつけてください。 総合評価は、5段階評価点の平均点から、A「19点以上」、B「18点～16点」、C「15点～12点」、D「11点～8点」、F「7点以下」とつけてください。(Fは「不可」としての評価になります。) 所見欄に評価の内容をお知らせください。特に評価点2又は1の項目については、詳しくお願いします。</p>									